

「大学入試と英語」
ブルース・L・バートン
1997.1.31 日放送

今年も早いもので、すでに大学入試のシーズンの真っ最中です。これから受験の皆さんは、最後の追い込みで大変なことと思いますが、家族の方々も、様々な形で応援され、また心配もされていることでしょう。受験の結果が、これからの人生を色々な意味で大きく左右するだけに、必死になられるのも無理はないと思います。

ご周知のとおり、日本の受験制度は、これまで国内・国外の両方で色々な観点から批判されてきました。そして、受験制度自体もまた、こうした批判や一般社会情勢の変化に応じて、少しずつ変わってきました。その結果、多くの問題点が改善されたように思います。

しかしその反面、改善とばかりは言えない、気になる点や再考を促したい点も少なからずあります。今日特にここで取り上げたいのは、「入試科目としての英語を廃止しよう」という最近の議論です。

ご周知の通り、英語は、日本の受験制度のなかで重要な位置を占めています。英語に割り当てられる採点比率は一般に高く、国公立・私立を問わず、英語の試験で高得点を取ることが、合格への大きな鍵になっています。そのために、ほとんどの受験生は、この大きなハードルを越えるべく英語の勉強に最大の時間を費やすことになるわけです。

ところが最近、このような受験における英語の位置づけを見直す世論が強まっています。例えば、去年の十一月に行われた中央教育審議会（いわゆる中教審）の総会において、大学の入試から英語をはずそうではないか、という大胆な改革案が出されました。提案の具体的な内容は、国公立や一部の私立大学の一次試験に当たる大学入試センター試験の科目から英語を完全に外し、英語力がどうしても必要な場合は、いわゆる「英検」を入試の代用としたり、または二次試験で論文やコミュニケーション面を重視した問題をだす、ということでした。

英語を外す理由は、入試の英語は、難解な読解力中心の問題が多く、国際社会に役に立たない。のみならずのみならず、授業で学ぶ英語教育に悪影響を及ぼしており、子どもの英語嫌いを生み出している、というふうに説明されています。

では、この思い切った提案は十分説得力をもっているでしょうか。少し考えてみましょう。

まず、提案の背景には、「受験英語は本来、入学後の学生生活でも、将来の実生活でも、十分使えて役に立つような内容から作られるべきだ」という基本的な考え方があると思われるのですが、これは全くその通りで、私も賛成です。試験だけのために覚えた、意味のない知識より、意味のあること、役に立つ知識をテストした方がいいに決まっているからです。

そして、指摘されているとおり、現在の入試の英語に色々な問題があることも確かです。英語でのコミュニケーション能力より、英語そのものに関する知識を重視する問題が多い

ですし、それも実用的な知識ではなく、今時どこでも使われていないような古い単語や表現だったりすることもあります。また、歴然たる文法や綴りの間違いもときどき見受けられるなど、出題者の英語力を疑いたくなるケースもなかにはあります。このように、入試の英語に様々な問題があることは確かですし、中学や高校の英語教育のあり方に大きな影響を与えたり、生徒たちがその被害を受けていることもまた事実だと思います。

しかし、こうした批判は果たして受験科目から英語を廃止する正当な理由となるのでしょうか。私は必ずしもそうは思いません。もし入試の英語が非実用的なものであるために問題になっているのであれば、話の筋としては、試験そのものをやめる前に、まず、実際に役にたち、生きた英語を出題するによって問題の解決を試みるべきではないでしょうか。改善も検討しないで、いきなり廃止するというのは、大きな飛躍であって、問題への積極的な取組とは思われません。

実際入試に出される英語の問題を見てみますと、状況は一昔前に較べたらずいぶん良くなっているように思います。傾向としては、英語の問題は、より実践的なものになってきており、読解力のみならず、会話力などコミュニケーションを重視したものも最近多くなっています。英語を母語とする教員の増加なども手伝って、こうした傾向は今後も続くものだろうと思います。こうした方向での改善が更に進めば、批判されている受験英語の「非実用的」性質も自然に解消されるはずで。

もちろん、私は絶対に受験科目から英語を外してはいけないと言うつもりはありません。個々の大学がそれぞれの教育方針に照らして、英語をテストする必要がないと判断した場合、入試科目から外すのはよいでしょう。入試にどのような科目を課すかはあくまでも大学の自由ですし、この点に関しては全く異論はありません。実際、この方向に動いている大学も少しずつ出てきています。

しかし、個々の大学のレベルを離れて、いわゆる国策として入試科目の英語を廃止しようという議論には賛成できません。なぜなら、英語は現時点でやはり重要な科目だからです。ことの善し悪しはともかく、英語が事実上の国際共通語となっており、日本人のみならず、どこの国の人でも、ある程度の英語を覚えなければ国際社会ではやっていけません。さらに受験が日本社会のなかでしめる位置や、中学・高校での英語教育の不備などを考えあわすと、受験科目から英語を外すということは、日本の若い人たちに「英語を勉強しなくてもよい」というメッセージを送ることになります。これほど無責任な話はないのではないかと思います。受験英語の改善もしなければ、英語教育の根本的な点検・改善も図らず、ただ受験科目から英語を外すだけでは、日本の英語教育の向上は決して望めないからです。

もう一つ重要なのは、受験英語がかかえる問題点は、何も英語に限らず多くの入試科目についても言える、ということです。例えば、入試に出される国語の問題も、あまり実用性がなく、中学校や高校で行われている国語の授業などに悪影響を及ぼしたり、子供たちの国語嫌いを生み出しているということもできるでしょう。もしこうした理由で英語を入

試から外すならば、他の科目も同じ論理で外さなければなりません。つまり、問題は受験英語だけではなく入試制度全体ではないでしょうか。

以上述べてきましたように、英語を入試から外すという提言は、そのままの形では賛成しかねます。しかし、提案の背景にある問題意識、つまり、入試でテストすべきなのは、試験だけのために覚えた知識ではなく、知ってためになる、入学後の人生で実際役に立つ知識だ、という考え方は基本的に正しいし、逆に、この考え方を英語の問題のみならず、試験全体に適用すべきだと思います。試験の内容が改善されれば、受験制度に伴う弊害もある程度解消されるはずです。今年の試験を始め、こうした考え方に基づく試験問題が今後主流になっていくことを期待したいと思います。